

笑顔礼讃西東

朗遊会様(東京都練馬区) 2~3

鏃狩座俳句会様(埼玉県大宮市) 3~4

横山一枝様(新潟市東区) 5

投稿作品 6~10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(初詣で、お詣り以外に必ずすることは何ですか?) 11~13

新潟ぶらり／東区の工場夜景 13

お客様の「リレーエッセイ」 水野喜子様 14

ニユースあれこれ 15

詠み人の「リレーエッセイ」歌人千葉聡様 16

# 12 December Vol.65

\*  
「喜怒哀楽」は、  
文芸を楽しむ方々の  
活力の源を目指し  
(株)ミューズ・コーポレーション  
喜怒哀楽書房が  
隔月発行している  
情報誌です。

## 詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース



### 温古知新⑱

## 「源氏物語」10

今回で、「源氏物語」のあらすじは最終回。浮舟を連れ去った薫。その後は……!?

薫は浮舟を宇治の山荘に連れ去ったものの、訪れるのも間遠でした。一方、匂宮は二条院で見かけた女のこと忘れられず、正月、中君のもとに届いた文から、女が宇治に住んでいることを知ります。匂宮はある夜、ひそかに宇治を訪れ、薫を装って寝所に忍び入り、浮舟と強引に契りを結んでしまいました。浮舟は次第に情熱的な匂宮に惹かれていくのでした。

ある日、宇治で薫と匂宮両者の使者が鉢合わせします。このことからこの秘密が薫に知られ、宇治の邸は警戒体制が敷かれてしまいました。薫に恨みの歌を送られ、匂宮との板ばさみに苦悩する浮舟。ついに死を決意します。死を間近に、薫や匂宮、母や中君を恋しく思いながら、浮舟は匂宮と母にのみ最後の文を書きましたためました。

浮舟の姿が見えないので、宇治の山荘は大騒ぎに。しかし、なすすべもないまま、世間体を繕うため遺体もないままにその夜のうちに葬儀を営みます。そのころ石山寺に参籠していた薫は、野辺送りの後に初めて事の次第を知ったのでした。一方の匂宮は悲しみのあまり、病と称して籠って

しまいます。

自殺を図った浮舟は、宇治川沿いの大木の根元に昏睡状態で倒れていたところを横川僧都一行に発見されて救われます。意識を回復した浮舟は、死に損なったことを知り、後に僧都に懇願して出家してしまいました。

翌春、浮舟生存の知らせに、薫は事実を確かめるため、浮舟の異父弟・小君を伴い横川の僧都を訪ねます。翌日、薫の使者として浮舟の異父弟・小君が小野を訪れました。小君が持参した僧都の文には、薫との復縁と還俗の勧めをほめかしてあり、簾越しに異父弟の姿を見た浮舟は動揺しますが、結局は心を崩さず、小君との対面も拒み、薫の文も受け取ろうとしませんでした。むなしく帰京した小君から「対面できず、お返事も頂けなかった」と聞いた薫は、(自分が浮舟を宇治に隠していたように)「他の誰かが浮舟を小野に隠しているのではないか」と思うのでした。

……と、ここで「源氏物語」は終わりを迎えます。この後にどのような事が起こるのかを明確には示さず読者の想像にゆだねる終わり方を「開けたままの終結」と呼び、「開けたままの終結」とする見解もあるようです。鎌倉時代から室町時代にかけて「山路の露」や「雲隠六帖」といった本帖の続編がいくつか書かれたことは、当時の人々がこのような終わり方を不満足に感じたからとも。

後世、数々の物語に影響を与えた「源氏物語」。みなさんも、この後の展開に想いを馳せてみてください。  
(古川久美子)

# 朗遊会

指導 佐藤朗々様

(東京都・練馬区)

去る10月19日、西武池袋線、ひばりヶ丘で行われた川柳の会「朗遊会」にお邪魔しました。

平成15年1月、ひばりヶ丘公民館の要請により開講した川柳講座は、終了時に有志らが「朗遊会」を発足し、月2回研鑽を積んでいます。

皆さん1時半からの開始前に参集し、席題「技」に頭をひねり、提出。1時半となり、今回初めて選者の任を仰せつかった谷田部さんが、前回提出した席題「ほのぼの」より、秀逸20句と3才5客を選び講評を付す。

前回の席題「ほのぼの」5客  
1 引戸あけ春はあけぼのほのぼのと

紀男

2 危機超えて今はほのぼの老夫婦

3 ほのぼのと見え隠れする恋心

4 ほのぼのと生きた証の手の温み

5 人柄がほのぼの誘う心地よき

人ほのぼのと陽だまりの猫昼寝する

智子

地明け方の空にほのぼの望の月

邦子

天ほのぼのとのぼる湯けむりかくれ宿  
作者：こういうところへ一遍でも行って  
みたかったという男の後悔です(笑)。  
桂一



▲ほぼ毎日指導にあたっている佐藤朗々様

質問：5客1の「引戸あけ春はあけぼのほのぼのと」の最後は「と」で助詞止めになつているが、これでいい？

朗々：余韻があつていいという人もいますが、短詩系でも文学である以上、きちんと起承転結を結び助詞止めは避けた方がいい。上5と下5を入れ変え「ほのぼのと春はあけぼの引戸あけ」としたらすつきりする。

質問：選者の谷田部さん「どういう選の組み立てをしたらいいのでしょうか？」朗々：師匠には、「君、選でドラマを作れ」と言われた。赤ん坊から小中高校、そして恋心、結婚生活、最後はあの世まで、たとえ28句の選の中でもそういうドラマを作り、3才5客はなるべく明るい句を選ぶこと、と教えられた。いいと思つても「母逝つて…」などの句は、3才5客ではなく秀逸にするなど。とても、いい選でしたよ。

続いて、テキストを使つての講義。

質問：「あさはか」「馬」の課題があつたが、いずれも難しく、思うようにできなかった。「あさはか」といわず、あさはかを表現するのか、それとも五七五の中に入れて作るものなのか？「馬」は見かけることも無くなり、テレビで

競馬を見るだけ。どのようになつたらいいのか？

↓課題のイメージを辞書で広げる

まず辞書で意味を確認し、用例を参考にする。

さらに類語辞典で類語を選び、その用例も参考にする。

「あさはか」①「考えが浅いさま」。用例として①「君のはあさはかな考えだ」②「早まった自分があさはかだった」とある。類語としては「短慮」「心無い」「無分別」「愚か」など。こうした言葉や用例をよく見て、心の中に潜在するイメージを顕在化させること。詠み込みの可否については、地域や吟社、選者によつて違いがあるのは事実。形容詞や動詞のような状態を表す言葉の場合、詠み込みもうとするかどうか。状態を説明しただけの句になりがち。詠み込まない方が句想と句意が広がると思ふ。

「馬」も同様に、たとえ意味がわかつてる言葉でも辞書をひいてみる。「サラブレッド」という種類や「馬の足」といった成句、「三春駒」といった玩具まで載つている。「名馬」「駿馬」「駄馬」など他の熟語、類語もかなりある。

黒板を使つてのお勉強が終わり、続いて、宿題となつていた折り句「もみじ」の作品を選句する。この「折り句」なるもの、「も・み・じ」の文字を川柳の中に詠みこむという手法で、上5の最初には「も」、中7の最初には「み」、下5の最初には「じ」を置くという決



▲ムードメーカーの和子さん

まりの中で句を作る。

他には、5・7・5でなくてはならない

(中8は禁止)、「も」「み」「じ」の語句が重なつてはいけない、というのが約束事。例えば、中7に「みじかいのち」などと詠んでいるので、「病句」と言い、禁則事項にあたるのだとか。

文字を当てはめるだけで精一杯と思ふのだが、さて皆さんの作品は：！？

5客

1 もち肌もち肌に乱れてなくし自制心

2 男心の情けなさですね、私も選びました(笑)。

作者：一生に一度でも、こういう想いをしてみたかった。最初、上5は「もうやめて」としていたが、あまりにも渡辺淳一先生のだったので変更した(笑)。

2 もうけもの見込み見込み違いの持参金

重明

金も何も持っていない女だと思つたら、ごっそりもつていたというおかしさ。

作者：嫁さんが超美人でグラマーだから





▲現在男性9名、女性8名が楽しみながら学んでいます！

ら、持参金はないと思つたら、がつぱりとしよつてきた。そのうれしさを詠んだ(笑)。

### 3 燃え尽きた未練切り捨て辞令待ち

隆生

一生懸命、仕事に尽くしてきた人の句作者：自分自身の反省もあるが、ぐずぐずと、なかなか未練なんて断ち切れるものではない。

### 4 燃え尽きて未練も捨てに寺社巡り

静勲

燃え尽きたら未練も何もないのでは？／未練も、「も」が気になった／こういう生涯を送りたくない、未練はなるべく持っていたいという意味で選んだ。

### 5 もう無理よみせかけ夫婦ジ・エンド

博康

まさかここでジ・エンドとは。うまい／仮面夫婦、ついにけりがついたというところか。

人猛暑にも御輿を担ぎ上機嫌 惠美子  
御神輿が好きなことが、句によく出ている。

作者：お祭り大好き一家で、半纏は50点持っている。これは別名「水掛け祭」と言われる深川の八幡祭りのこと。

地も二度見事フサフサ地毛が夢 隆生  
リーブ21のCMが大嫌いで、出るとパチンと切る。頭が光が丘になってしまったわけで「地毛が夢」がいい／これはもう二度と地毛には巡り会えないと思う、いかに隠すか、潔く待つかのどちらか(笑)。

天燃えた日に身ごもり産む子自信作 桂一

これは難しい句。実体験から詠まれた極めて歴史的な重みがある句だと、衝撃を受けた(笑)／実感として自信作、と言いつつ切るところがなんてすばらしいのだろうと。

作者：38歳の長男夫婦が来年出産予定。二人とも、世の中の粹も甘いもかみ分けている年齢。若いときに純粹に燃えてできた自信作とは違うんじゃないかと。

★のつけから、この後の懇親会まで終始一貫、笑いが絶えず、内容盛り沢山の「朗遊会」。合計11カ所で指導にあたられているという朗々さんはじめ、皆さんさばけていて笑顔がとてもいい。月2回の開催にもかかわらず出席率が高いことから、楽しく学ぶことがどれだけ待たれているのかわかる。お腹からの快活で明朗な声を響かせながらのご指導、聞きほれてしまいました。(木戸敦子)

## 鍬狩座俳句会

吉原三郎様

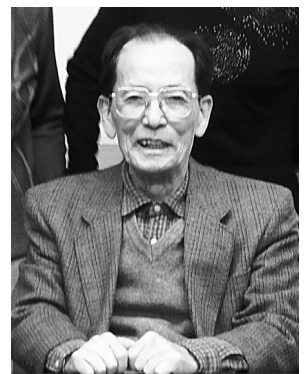
(埼玉県・大宮市)

去る11月10日、越谷中央市民会館で行われた鍬の狩座俳句会にお邪魔しました。代表の吉原さんは、加藤椀郎が教鞭をとっておられた春日部高校にも在籍していた元、高校の国語の先生。かつて、埼玉県教育委員会と春日部高校がタイアップして開いた俳句講座の講師をつとめたことから、当時の受講生を中心に狩座俳句会が誕生しました。

7句提出の10句選。諸連絡のあとには、披講、全員による短評、代表の選と寸評へと続く。進行役の斉藤かずこさんより、次回、新宿御苑での吟行会の説明がされると「私、この吟行が楽しみで生きているの。いつもいい企画で、どこへでも連れていってもらえるし、皆さん和やかでインテリジェントでほとんど心安らくんです！」(笑)と、お礼とねぎらいの声があがる。



▲季刊の「鍬」最新号は209号



▲俳句の話をしたら止まらない吉原主宰

その後、各人が選んだ句を順番に評する。

木の葉踏む音より冷気はじまりぬ

トシ江

落ち葉を踏む音が冬に向かつていくように感じられた。

青き木の実踏んでしまいし胸さわぎ

トシ江

ふと踏んでしまったとき、穏やかな気持ちでなくなることがあるので、よくこのような句を作られたなど。

エンディングノート一冊冬隣 三郎

名詞ばかりの句。エンディングノートとは万が一に備えて自身の希望を書き留めておくもの。ノートの持ち主は、どうなったのだろうか？と。「冬隣」という

季語が絶妙で、他に何も言っていないのに印象が鮮明な句。

生き別れ死に別れして芒原 かずこ

芒原の季語がふさわしい。

立冬の風の棲みつく埴輪かな 富佐枝

先日、房総の芝山古墳を見てきたが、吹きさらしのなか、埴輪の目はうつろでまさにこのような光景だった。

烏瓜垂れをり太宰入水的地 登

太宰が心中した玉川上水、その場面が「烏瓜」でより鮮明に見えてくるよう。

登

登

登

登

登

登



▲俳句を通して人生をエンジョイし深めているみなさま

**思出てふやつかないもの牛膝** 富佐枝  
 思ひ出は美しいものもあれば、やつ  
 かないものもある。そのうんざりする  
 ような思ひ出を、実がすぐ衣服に付着  
 する牛膝で表してうまい。

続いて代表の選  
**秋間近か地獄餓鬼畜生がどつと来る**

随雲  
 地獄道、餓鬼道、畜生道に人間は  
 迷わされているという、今までの句に  
 はないおもしろい句。ただ、材料が多  
 すぎて何を言っているのかわからなく  
 なった。3つのうちどれか一つを省け  
 ばよくなるし、「秋間近か」より「冬近  
 し」がいい。

冬近し餓鬼畜生道がどつと来る

脳細胞の衰えし色なき風に かずこ

採られていない句ばかり選んでいる  
 (笑)。逆に言えば、皆さんの選は類型  
 が多いということにもなる。なぜか？  
 それは日常茶飯のことばかりを取り上  
 げ具体的に表していくと、生活のこも  
 ごもしたことにとられ、それ以上に  
 はならないから。人間探求派・生活  
 派の迷路。それを破ったのが金子兜太  
 だ。「ふくろうに真紅の手毬つかれを  
 り」は、加藤楸邨の最晩年の句だが、  
 何を言っているのかわかる人は、あま  
 りいないのではないか。楸邨は、本当  
 は究極の世界(軽みや虚の世界)へ行き  
 たかったんじゃないかという気がする。  
 芭蕉にもそういうところがある。

この句は、本人はもの足りないかも  
 しれないが、「色なき風脳細胞の衰え  
 し」とした方がわかりやすい。

歩いては帰れぬ旅ぞ冬銀河 静子

「ぞ」ではなく、「や」がいいと思う。  
 切れ字は遠慮することなく、どんだん  
 利用するとい。切れがいいということ  
 は、具体的なことをいいながら抽象的  
 にしているということ。つまり、抽象  
 をつくるために切れがある。事実その  
 ものを具体的に言ったらそれは報告。  
 それを切ることで、断絶を置くことで、  
 間ができる。

生き別れ死に別れして芒原 かずこ

今日は、運命がどうのとかいう類の  
 句が多いが、俳句のものはモノとコト  
 しかない。観念的俳句を作るとは勝  
 手だが、観念で進めては詩にはならな  
 い。そのうえ、いつの間にか忘れられ

る。この句は観念的な俳句の中ではい  
 い方。原っぱの「芒原」ではなく「芒か  
 な」の方がいいと思う。

楸邨の実羅漢の如く土に置く 静子

楸邨の実が仏さんのようだと言つて  
 いる。こういうおもしろい句はいい。

冬立つや廃墟ばかりの写真展 登

今、村上春樹ばかりを読んでいる。  
 文章がうまいし内容も斬新。小説に  
 「廃墟」という言葉がよく登場する。

冬隣身ほとりの音消えてをり 智

身ほとりなんてうまいねえ。  
 ※みⅡ接頭語、ほとりⅡ側、あたり、  
 かたわら、近く

水底の透けて水鳥影おとす トシ江

よく観察された写生句。底の方に影  
 が落ちてることから、透けているこ  
 とはわかるので「透けて」をとって、「水  
 底に水鳥の影落ちてをり」でいい。俳  
 句は平凡で焦点をはつきりさせて詠う  
 ことが鍵。

草の絮飛ぶや反身の太太鼓

あれもこれも入れたいのはわかるが、  
 これも材料が多すぎる。

人寄せの張り子の虎や冬木の芽

誰もとっていないが、とりあわせが  
 うまい。

晩秋の風に吸ひつく鯉の口

「吸ひつく」が問題。「晩秋の風吸ひ入  
 るや鯉の口」と少しボヤツとさせた方  
 がいい。

他、高得点句  
 藁葺の切口厚し冬に入る 星子  
 煩惱を払ふがごとく黄落す かずこ  
 空重き十一月の放水路 登

★杖をつきつつも、毎月の吟行は欠か  
 さず出席され、毎日10句20句を作る  
 のは当たり前、それを何十年と続けて  
 いるという毎日が俳句漬の吉原代表。  
 以前、喫茶店でお会いした際は、心筋  
 梗塞になつて以来タバコは止めていると  
 おっしゃっていたが、喫煙席しかあいて  
 おらず、「喫煙席なのに吸わないと悪  
 いからね」と、タバコを取り出すま  
 ねをするユーモアも。そんな先生のお  
 人柄と的確なご指導の魅力、そして会  
 の運営を一手にリードする斎藤さんの  
 行動力に導かれ、永年にわたって皆さ  
 んが毎月この狩座俳句会と吟行会を心  
 待ちにされているということがひしひ  
 しと伝わってきた。  
 (木戸敦子)



## 横山一枝様

「ね、なかないで」

(新潟市東区)

今年5月、絵本「ね、なかないで」を出版された横山一枝さんにお話を聞きました。

◎絵は小さいころから？

絵は好きだったので、3人の子育てが終わったら習いたいと思いつつ、そのまま両親の介護に突入。その介護の真っ最中に、たまたま近くの友だちの家の離れに子ども向け絵画教室があることを知り、幼稚園児や小学生と絵を習い始めた。子どもたちと一緒にだから、楽しくてね。その後、10年前の2002年にはNHKの絵本を作る教室に通い始め、製本までを一通り習得すると、あとはほとんどストーリーがわいてきて、はまってしまった(笑)。それまでも、夫が晩酌をしている脇で花の絵を描いたりはしていたが、絵本に出会って、しつくりとなじむ表現手段を得た。

◎ストーリーの源泉は？

小学4年生までは新潟の東蒲原郡三川村という山奥の田舎で育った。山



▲紙面ではお伝えできないが「アッハッハ」と豪快に笑う横山さん

やら川やら自然の中で育まれた記憶と感覚が非常に濃く、それが幼児体験として染みついている。結婚した当初も、急に山が恋しくなつては「お父さんもう限界、連れてって」と一年に一度は夫に三川に連れ帰ってもらっていた。子どもの頃、父は出稼ぎでほとんどいなかったし、母も朝から晩まで働いていて、祖父母に守られて育った。そんな当時の想い出と記憶をたどって描いている。

◎「ね、なかないで」はどうして出版を？

手作りで絵本を作り始めて10年、ちょうど65歳という区切りもあり、一冊ちゃんとした本を出版したかった。アメリカのタオスという田舎に嫁いだ娘に相談するとインターネットで調べてくれ「ここ、よさそうだよ」と教えてくれたのが、家から10kmと離れていない御社。不思議なご縁を感じ、恐る恐る訪ねたわけです(笑)。

主人公は、保育士の補助をしていたときに出会った生後6ヶ月の男女の双子ちゃん。特に男の子は最初から目と目があつて、いつも私から離れなかった。そのとき、自分のことと相まって「子どもつて、親でなくとも誰か一人でもこうやって抱きしめてあげる人がいれば、結構強く育つし、優しくもなるんだ」と気づかせてもらった。この絵本を通して「みんなあなたのことを見守っているよ」というメッセージを受けた、と感想を寄せてくれた方もいるが、もうこの作品は自分の本棚から歩いて立ち上がった子ども。感じたままに読んでほしい。この男の子、今は小学校2年生になり、先日個展に家族で



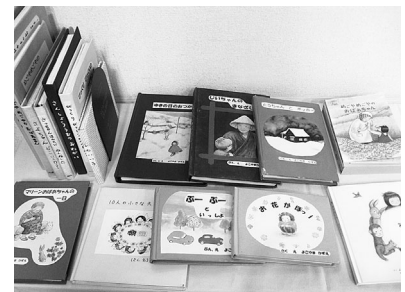
▲娘夫婦の協力を得て英訳文も併記した

◎描きたいことがたくさん？

大人になると、あまり感動はないと思つていたのでたくさんのお会いと感動があるの！だから、描き終わるかと思うと終わらず、まだ10個くらい手持ちがある。プロの作家でもないから、作りたいものを作つて自分で喜んでいただけ。追跡調査したわけではないが「子どもがこの本大好きなの」という方が、少なくとも2人はいて、それだけで力になっている。その1人か2人の人のために描いていきたいし、1人の人に抱きしめてもらえる絵本であれば満足。

◎今後は…？

本が完成したときは、感無量だった。動物一つ描くにも、生態等を全部調べ、わかつたうえでないと描けない。わかつて変えるのとわからないで想像で描くのでは違う。以前にも、昔の電報の様式はどんなだったかを、どうしても描きたくて、ようやく探し当てた。そういうことも大変だけど、理屈じゃなくて絵本で表現していくことが、やっぱり好きで楽しい。あと何年描け



▲手作りの本の数々



▲とぼけた味のご主人 小太郎さんと

るのかと思うと、やはりこの一番心地いいことを続けながら、また誰かの琴線に触れる絵本を出版したい。そして、御社と巡り会えたことが何よりの喜び。また、いつでも飲み遊びに来てね！

★絵の描けない当方、つい「おもしろいんですか？」と聞いてしまう。間髪入れず「楽しいのよ、木戸さん！苦しいけど楽しいの！」と即答する横山さん。ちょうど作品展の会場でお話をお聞きしたが、来場者から「懐かしい光景ですわね」「気持ち穏やかにあります」と声がかかる。そして、途中「ナイス トウミュー」と言いながらご主人の小太郎さんをご登場。奥さまのことをお尋ねすると「一言で言えばすばらしいね。自分の想いを作品として仕上げられる力をもっているのだから」と。来年以降、この絵本を車に積んでご夫婦で震災の被害にあった宮城県を中心に図書館に寄贈したい、という夢もある。そして、来年4月から横山さんはかつて習っていたNHKの絵本講座の講師となる。今度は新しい表現者を創出する番だ。(木戸敦子)

# 投稿作品

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。しめきり 2013年1月18日まで

## 短歌

- 1 金色の稲穂のかほり満ちみちて秋夕  
焼の限界集落 黒澤正行(福島県)
- 2 秋空に君がドライブ八甲田色づく紅  
葉酸ヶ湯に入る 新井賢(埼玉県)
- 3 わたしたちにあわせてくれなければ  
おとことはやれないわ 梅澤鳳舞(埼玉県)
- 4 人形は白いビーズで顔囲むめだまは  
赤くアフリカ土産 佐野澄江(山梨県)
- 5 辛辣な言葉投げつけ出て行く子受け  
取めるのは親なればこそ 音喜多千津子(埼玉県)
- 6 年の瀬や越すに越せない国境線竹島  
尖閣北方領土 関子利明(兵庫県)
- 7 竹藪で筍を抜く夢の中「地震ですよ」  
とヘルパーの声 今井忠一(東京都)
- 8 オスプレイ飛ばはずの無きこの空に  
音掠めしは今朝の残像 椎忠夫(神奈川県)
- 9 秋深し厳しき冬を目前に準備に忙し  
豪雪の里 山本敏順(長野県)
- 10 薬局の創立百年祭米寿八ちんまり  
座る 高須孝(愛知県)

- 11 日に一度眼鏡取替え首都圏の駅を  
なぞれる老いの旅人 齋藤忠弘(千葉県)
- 12 コクトーの好みし黒きセーターを秋の深  
みへ放り投げたり 北岡晃(兵庫県)
- 13 灯を消せばこころぎの声一斉に甦り  
くる面影しばし 高橋邦子(高知県)
- 14 赤彼岸土手に広げて六年目白を散り  
ばめ託す一年 佐伯セツ子(香川県)
- 15 幾日ぞ君との口癖「暑いねえ」暑さの  
夕餉冷奴二つ 土屋喜雄(山梨県)
- 16 提灯をゆらしゆらして人間が曳く山  
車がゆく道の真ん中 若林卓宣(三重県)
- 17 戦国の軍師のごとく語る史家聴衆も  
また軍師となり 篠原三郎(静岡県)
- 18 敬老の宴過半数を占む単身に「夫唱  
婦随」の常しなへ乞ふ 西山悌三郎(高知県)
- 19 大根は黙って太くなってゆく人間は愚  
痴ばかり言って老いてゆく 暉峻康瑞(鹿児島県)
- 20 波音の轟くような絵の前にしばし動  
けず汐の香をきく 野口初江(茨城県)
- 21 下町のスカイツリーの威丈高いまだに  
続く開業人氣 大竹憲弥(新潟県)
- 22 西日浴び蜻蛉の羽きらきらとあまた  
輝く稲穂田の上 桑原謙一(群馬県)
- 23 動物園で子供を生みし母象は子と離  
されて人を殺めり 笹倉邦康(重信)(千葉県)
- 24 美しく老いるなど無し傘寿越え心の  
内にやさしさの欲し 竹野紀子(東京都)
- 25 おしどり人もうらやむ夫婦互い  
に氣遣い余生をホームで 田中迪子(東京都)

- 26 茫々たるすすきの穂群たまさかに車  
過ぐればおおきくゆれる 緑川葉子(福島県)
- 27 万両のひよどり啄ばむ忘れしか二  
粒赤く秋日にひかる 小暮昭司(群馬県)
- 28 ふる里へ記念植樹のバスツアー桜の花  
見夢みて植へる 大鳥居牧子(東京都)
- 29 泣きに来る母の墓前に彼岸花ものい  
うごとくくれないに咲く 寒川靖子(香川県)
- 30 近いうち解散盾に消費税値上げ決め  
たと吠える政治屋 野中よしみ(神奈川県)
- 31 手に持ちし筈が手になき黒日傘、記  
憶のかけらこぼして歩む 山内寿子(京都府)
- 32 歌の友の形見とも培ひし十五年この  
夏の酷暑にあららぎ枯れ果つ 木暮珣子(群馬県)
- 33 電線に音符の如くからまりてブルー  
ス踊るからすうり四つ 濱崎祥子(鹿児島県)
- 34 捨てられぬ教育勅語の軸一本政治  
ごっこ世の忘れもの 小笠原紗恵子(神奈川県)
- 35 ヒメノモチ味の良いの知ったよう追え  
ど払えど群がる雀 高井逸代(岡山県)
- 36 満たされし筈の心を穿ちゆく寂しき  
といふ小さな欲が 岩橋千代子(北海道)
- 37 街さびれ過がる人さえ居ぬ暗さ猫の  
鳴く声薄く響けり 小黒深雪(新潟県)
- 38 我が町の街道筋の真ん中に夕日落ち  
て彼岸知りたり 辻忠城(東京都)

- 39 猫じゃらしあら懐かしと見詰めたら  
小風に揺れて招きいること 田中豊恵(新潟県)
  - 40 年命を重ねるだけで人老いず失せた  
る希望に人は朽ち果つ 吉野成行(愛知県)
- ## 川柳
- 41 苦々しくも笑顔応待 松田重信(埼玉県)
  - 42 投書欄修身習った人ばかり 石原岳(群馬県)
  - 43 豊作でライスセンターまた笑う 工藤昌見(山形県)
  - 44 どのように書いても「ホ」の字笑ってる 丸山芳夫(東京都)
  - 45 面白い嘘だと聞ける両の耳 田澤宏(新潟県)
  - 46 空白の日記の奥にある秘密 宮崎正男(群馬県)
  - 47 母さんが教えてくれた人の道 守屋高雄(岩手県)
  - 48 ピツケルが錆びて倉庫で眠ってる 大江秋月(兵庫県)
  - 49 山を愛で永久の聖地へ行ったまま 楠瀬美香(高知県)
  - 50 歌舞音曲この世は夢をみるところ 神田治(千葉県)
  - 51 世の隅に居て故郷を恋しがる 久本にい地(岡山県)
  - 52 愛用してるばあちゃんの知恵袋 石山幸枝(新潟県)
  - 53 能くできた話しにあった落とし穴 青木日出男(群馬県)
  - 54 散歩道やがて徘徊する予感 藤沢健二(千葉県)
  - 55 一つから百も解けたわなぞぞぞが 細川光子(栃木県)

- 56 君からの命令形が心地良し  
岡本恵(茨城県)
- 57 私は腕まくり嘘を言うために  
久保和友(滋賀県)
- 58 被災地に復興願う彼岸花  
近藤はつみ(福岡県)
- 59 百円の秋刀魚刺身で睦しく  
小山恵美子(大阪府)
- 60 信号は待てば必ず青になる  
磯山陽吉(東京都)
- 61 カラス見て黒いと言って外される  
奥田音野(香川県)
- 62 癌脱毛木の葉髪とぞ思ひをり  
梶鴻風(北海道)
- 63 青春を知らない女医が手に触り  
山崎一嘉(愛媛県)
- 64 乾杯の持つ手もはずむ名口上  
諸橋文男(新潟県)
- 65 床の中猫に聞きたい不眠症  
高松秋良(群馬県)
- 66 沸点を超えた怒りを鎮めねば  
安田翔光(香川県)
- 67 久し振り雨音聞いて空を見る  
松田義登(福岡県)
- 68 ガラス越し母に似てきた立ち姿  
奥那於子(大阪府)
- 69 寒いのはイヤと水道出てこない  
鈴木青古(茨城県)
- 70 秋風が一人になれ、と僕に云ふ  
安木沢修風(新潟県)
- 71 からみつくへくそがずらは迷わない  
藤井碩子(山口県)
- 72 惚ければ人本性をあらささま  
竹村穂夫(大阪府)
- 73 飛び出した蛇さんあなたは来年ネ  
南喜美子(千葉県)
- 74 そこそこの色気忘れず世を渡る  
大岩歌子(岡山県)

- 75 正道を歩けと語る父の靴  
鈴木義雄(福島県)
- 76 額入れた色紙上手いと自画自讃  
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 77 透明なマスクに笑顔入れておく  
鈴木章(新潟県)
- 78 身のまわりすべて任せた妻が逝き  
藤井北灯(福岡県)
- 79 参道の木洩れ日欲を消してくれ  
増島淳隆(東京都)
- 80 親に恩返せず孫や子に送る  
鏡たか子(山形県)
- 81 新発田市と聖籠町が結婚を  
大川聡(新潟県)
- 82 国有化バランス欠いた行政府  
益永克之(福岡県)
- 83 追伸に本音のぞかす母の文  
野田明夢(新潟県)
- 84 路地裏は昭和の風の匂いする  
中林恵子(大阪府)
- 85 政局の話しは止そう腹が立つ  
村岡盛英(群馬県)
- 86 若ものの茶髪はやるか平和ボケ  
山崎寿美子(富山県)
- 87 飲み過ぎて足もふらふら千鳥足  
原田英一(千葉県)

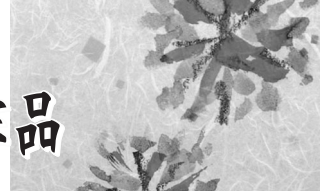
俳句



- 88 流れ星忘れ難きことつぎつぎに  
猪股凡生(新潟県)
- 89 赤とんぼ手おんぶの娘に幸あれや  
田島星景子(宮城県)
- 90 あるがまま生かされ生きて秋深し  
井原穂子(東京都)
- 91 牧閉ざす大きな雲のゆつくりと  
環順子(東京都)
- 92 女神待つ峡の粧ひ通ひ道  
有坂馨園(福島県)
- 93 喜怒哀楽喜少なき年暮るる  
橋本世紀男(東京都)
- 94 越後ではエチゴエチエよ初しぐれ  
阿部至(埼玉県)
- 95 雪乗せて車も家も丸くなり  
関根千恵(埼玉県)
- 96 古枯しの川辺に寄りてお菜洗い  
須澤重雄(長野県)
- 97 父の背をゆつくり流し惜しむ秋  
松涛千鶴子(東京都)
- 98 大橋に人等まばらに良夜かな  
山崎ゆき(東京都)
- 99 二杯目のグラスの底の秋思かな  
渡辺嘉幸(東京都)
- 100 荒川の土手下りきて虫時雨  
福山三智子(東京都)
- 101 選果場秋を灯して夜もすがら  
土谷敏雄(秋田県)
- 102 箸で食ぶ茸たつぷりスパゲッティ  
石井美智子(埼玉県)
- 103 あしたには裸木となる一樹かな  
服部八重子(東京都)
- 104 うたかたの日々甦える秋灯し  
野村牟人(東京都)
- 105 つれづれに昔語りや秋の夜  
高橋トミ子(山形県)
- 106 ダムの罪熱く告発あゆつり師  
富樫和子(山形県)
- 107 いにしへの想い出楽し夜長かな  
五十嵐睦博(新潟県)
- 108 休みなき妻にあげたい女正月  
小松政雄(長野県)
- 109 星月夜べにさしゆびはあけておく  
稲垣恵子(埼玉県)
- 110 掌に受けし木の実に言葉あるごとし  
吉田未灰(群馬県)
- 111 路線バス消えたふる里墓洗ふ  
山崎吉晴(群馬県)

- 112 油虫打つに差し足忍び足  
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 113 柏手の二つ筈す初御空  
阿部徳夫(宮城県)
- 114 初春に真一文字に紅をひく  
阿部澄江(宮城県)
- 115 秋朝の白き二の腕脈しつか  
千代田俳徒(東京都)
- 116 行く秋を惜しみつつ干すスニーカー  
三ツ木宗一(東京都)
- 117 小鳥来て親子かつがいか睦まじく  
田野倉訓郎(東京都)
- 118 仙石原すすきに埋れ宿急ぐ  
松尾らん(東京都)
- 119 義仲寺にみちびかれたる時雨かな  
磯部徳彦(東京都)
- 120 急ぐこと何もなくなりこぼれ萩  
堅田秀子(東京都)
- 121 盆と暮れ家族集いて安堵して  
大橋絵代(千葉県)
- 122 秘めし恋三つ算える星月夜  
大橋恒次(新潟県)
- 123 三種類の無花果買ひし寺の町  
柚山美峯(東京都)
- 124 傷秋やさよならはいつも唐突に  
高崎登喜子(東京都)
- 125 ものの芽や見知らぬ賤に朽ちるとも  
関忠恕(静岡県)
- 126 老醜はむしろ勳章蚯蚓鳴く  
紺谷睡花(東京都)
- 127 秋虹を渡る所詮は一人なる  
林 克(福島県)
- 128 紅葉燃ゆむかし学舎海に向く  
菊池シュン(青森県)
- 129 杖をつく脚のふらつきさのこ草  
松嶋光秋(東京都)
- 130 黄の消えて一日見ぬ間の刈田かな  
石崎ひろ美(神奈川県)

# 投稿作品



- 131 敗蓮のかげに小さきネズミの仔  
白戸麻奈(東京都)
- 132 ねぎらひの芋煮囲みて長寿眉  
上村元義(神奈川県)
- 133 コモスの咲いて乱れる交差点  
早矢仕邦夫(愛知県)
- 134 牛つなぐ石に孔あり岩清水  
佐野和彦(静岡県)
- 135 道庁に活けられし枝ななかと  
福田和子(東京都)
- 136 蜻蛉の光となりて戯れる  
平山千江(岩手県)
- 137 月昇りビルのネオンとひびきあう  
小形さだ(東京都)
- 138 物忘れしながら生きて芒の穂  
副島加代子(宮城県)
- 139 安達太良のほんとの空や今朝の秋  
村上克哉(東京都)
- 140 地引綱曳く声高し秋の空  
古谷力(東京都)
- 141 キツサ店山をあおげば山よそ  
樋口二葉(三重県)
- 142 淡蟬といふ夕暮れのながれかな  
安部哲(新潟県)
- 143 大根引き太き一本上げて見せ  
田中昶(鳥取県)
- 144 傍に居て少し距離おく赤蜻蛉  
椋本望生(大阪府)
- 145 鯛や真水のごとくみまかりぬ  
小島岳青(新潟県)
- 146 三体の首なし地蔵すさまじや  
新田一望(岩手県)
- 147 秋さなかノーベル賞に日本沸く  
山田幸代(兵庫県)
- 148 萩の池亀の花子を追ふ次郎  
炭崎博(滋賀県)
- 149 携帯を持たずに旅の花野かな  
布目雅之(埼玉県)
- 
- 150 小鳥来る機微の通じる子のありて  
堀木和子(大阪府)
- 151 負けないうで折つています来る春を  
山本善輔(兵庫県)
- 152 流れ来て雲やわらかく月包む  
今井岩夫(千葉県)
- 153 作品展褒めの握手や鳥渡る  
神一男(静岡県)
- 154 秋日和春日奥山獣道  
山本直子(大阪府)
- 155 亡き母と桃を貰へば限りなし  
小井寒九郎(三重県)
- 156 号砲と美声のマイク運動会  
居原田連星(大阪府)
- 157 女だけ住む家の庭次郎柿  
小林七重(新潟県)
- 158 秋津島山うつくしく菊香る  
宇田川正雄(埼玉県)
- 159 洛中洛外新涼の風のなか  
早乙女文子(埼玉県)
- 160 序奏あり休止もありて秋の蟬  
夏目満子(東京都)
- 161 行く秋の世界見渡す静寂かな  
福岡悟(東京都)
- 162 水を打ち隣る人との長話し  
美濃部紘三(新潟県)
- 163 ぼつねんと敗蓮に佇つ吾があゆみ  
重原昇(新潟県)
- 164 高原を行き交う人や花野風  
大場きよし(宮城県)
- 165 飲み薬一つが減りて秋晴るる  
藤沢樹村(東京都)
- 166 そばの花水平線の幾千里  
竹澤茂子(大阪府)
- 167 風一陣願ひの糸を色めかす  
須田洋子(埼玉県)
- 168 屠腹せし十有九土桐一葉  
渡辺茫子(千葉県)
- 
- 169 強面のま、曳れゆく秋の蜂  
三津木俊幸(千葉県)
- 170 急ぎ足白髪なりてすすきの穂  
杉村美保子(岩手県)
- 171 亡き妻の墓をへだてて彼岸花  
森俊彦(神奈川県)
- 172 落葉掃き五色の紅葉一人じめ  
芋木匡子(滋賀県)
- 173 耳殻この不思議な客ち秋の暮  
鈴木岑夫(千葉県)
- 174 松茸は一子相伝肩に籠  
津田忠彦(岡山県)
- 175 待ち合わす平群小菊の道の駅  
野木宗信(奈良県)
- 176 新涼の早朝の街パン焼く香  
竹本美美子(新潟県)
- 177 牧牛のみな影をもつ日向ぼ  
北村純一(神奈川県)
- 178 点々と牧草ロール秋晴るる  
長峰正晴(千葉県)
- 179 川の音に愁思流して一人旅  
岡村君枝(茨城県)
- 180 夕しぐれ魚信待ちけり何の其の  
油谷郷史(兵庫県)
- 181 ふつくらと里の恵みの零余子飯  
中田文子(大阪府)
- 182 亡兄の香の薄れゆく椅子秋深し  
中嶋清子(佐賀県)
- 183 借景の園に真白き貴船菊  
宇都宮萬里(静岡県)
- 184 身にしむや一途な眼光憤怒怨  
矢野絹枝(東京都)
- 185 神木に幸念じ合うみくじ札  
小林敏宏(長野県)
- 186 金木犀無縁仏にも香手向く  
道給一恵(埼玉県)
- 187 妣恋はば邯鄲の声仏間から  
星野三興(新潟県)
- 
- 188 ラベンダー刈る藤色の濃霧の中  
佐瀬千恵(神奈川県)
- 189 家うつりし木枯し待つ身の六十路かな  
福原喜恵子(群馬県)
- 190 秋晴れて今やれることやるがよし  
神作洗江(埼玉県)
- 191 懸命の子に囁るる運動会  
中西秀雄(東京都)
- 192 「愛す」とは「許す」の謂を花柀  
川崎洋吉(福岡県)
- 193 咲き競ひ人を離さぬ菊衣展  
前川和市(兵庫県)
- 194 餌を狙ひ羽音残して鴉の影  
杉原明子(静岡県)
- 195 岩風呂の中まで沁みる蝉時雨  
寺岡文生(静岡県)
- 196 秋うらら子等喜んで栗拾う  
延原令岱(岡山県)
- 197 夫逝きて独りの夜の長かりき  
萬濃その子(神奈川県)
- 198 わが里も同じ香りの吾亦紅  
神野弘(岡山県)
- 199 秋の灯やきらめく川を尾形船  
原田かずゑ(千葉県)
- 200 秋深むどうか元気で地震の街  
菊地すえ(北海道)
- 201 お母さん「浄土も暑い秋ですか」  
中岡昌太(神奈川県)
- 202 とりあえず走しり稲穂を供花とする  
岩崎政弘(岡山県)
- 203 ドクターの診断聴きし部屋暑し  
日根野昭治(大阪府)
- 204 コスモスや言葉少なに別れけり  
吉村充治(埼玉県)
- 205 紅葉の木洩れ日夫とくぐりけり  
二瓶邦枝(埼玉県)
- 206 茅屋に残りて著るき貴船菊  
長野光康(神奈川県)



- 207 鯛を聞かず吟行終りけり  
小山たけし(埼玉県)
- 208 新しい住居の決り小鳥来る  
有田裕子(北海道)
- 209 限りある命点して彼岸花  
石田義岡(山梨県)
- 210 天高しジャンプも高くイルカショー  
羽根田明(神奈川県)
- 211 乙女らの恋知るころや切籠の灯  
山東爺(北海道)
- 212 満月と瓦礫のはなし皿にのせる  
棚橋麗未(東京都)
- 213 鳴く虫を隠居爺の子守唄  
忍正志(兵庫県)
- 214 銃声に鉄砲百合の崩れ落ち  
日下温水(東京都)
- 215 金比羅やおんひらひらと秋の蝶  
井上静夫(栃木県)
- 216 軍人が先頭を行く秋の末  
緑川禎男(埼玉県)
- 217 蜻蛉舞ふ青き大空ステージに  
田野井一夫(栃木県)
- 218 山粧う取り敢えずとりあえずと言ひ  
乍ら  
池田岬(埼玉県)
- 219 遠き日の思いのよぎる餅筵  
内河邦久(東京都)
- 220 ほろ苦きあけび一品湯宿かな  
菅井文男(新潟県)
- 221 虫の音に心預けて葡萄詰む  
木村舳(山形県)
- 222 這ひはひの腎追ひかけて小六月  
今井勝子(新潟県)
- 223 空似でも逢いたき人の冬帽子  
堀田寿美子(北海道)
- 224 濃く熱きコーヒー淹れて夜なべかな  
門脇信憲(鳥取県)
- 225 罪深き浮世を捨てて蛇穴に  
浦橋克行(兵庫県)
- 226 故郷へ向かう二人に山紅葉  
河合ヤスエ(大阪府)
- 227 満月や地球の呼吸見守りぬ  
武市愛子(大阪府)
- 228 梵鐘やほろほろ零れ萩の花  
勝田久美(大阪府)
- 229 黄落は減びる覚悟出来ぬまま  
辻升人(東京都)
- 230 刈り田跡仰向く案山子任務果て  
佐野しづ子(愛知県)
- 231 撫子の花をメジャーにした五輪  
濱田イサオ(福岡県)
- 232 木洩れ日の鈍き流れやこぼれ萩  
岩村昇(神奈川県)
- 233 水澄みて魚青空を突きやぶる  
堀井酔人(茨城県)
- 234 急くコンバインいなご等の散乱す  
藤井春三(埼玉県)
- 235 雑草の中に紫陽花ひとつ咲き  
木下精(大阪府)
- 236 秋天や手元に戻るブーメラン  
西口東治(大阪府)
- 237 秋扇や言はずもがなを言ひし悔い  
高瀬秀嘉(静岡県)
- 238 師の敷紙大口開けし栗の毬  
清まさじ(静岡県)
- 239 電線の帰燕はすべて南向く  
湯浅芳郎(岡山県)
- 240 うつくしき落葉ふりふる良寛忌  
増田信雄(埼玉県)
- 241 着せかへてさらに華やく菊人形  
高松ゆか(神奈川県)
- 242 実を結び心も充ちて秋の空  
水落重武(新潟県)
- 243 窓際の菊一輪や十五夜を待つ  
若月理依子(新潟県)
- 244 犯人を捕らえ一息ソーダ水  
加用章勝(千葉県)
- 245 枝豆や家族揃いしころ偲び  
塚田寿子(埼玉県)
- 246 腸から喰ふ獣のやうに初秋刀魚  
原田麦吹(埼玉県)
- 247 日に透ける緋の色が好き紅葉かな  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 248 金木犀風ふくいくと鎌倉路  
川嶋法子(東京都)
- 249 譜面台に点字楽譜や秋惜む  
小野寺裕子(宮城県)
- 250 凜然と色を保ちて寒椿  
青木ケン子(埼玉県)
- 251 毛筆で写経なぞるや暮易し  
岩永登茂子(大阪府)
- 252 くつろいでかかとをさわる秋の宵  
山川幸子(東京都)
- 253 木枯や水の青きに橋の影  
有田俊一(埼玉県)
- 254 赤蜻蛉庭に来てると病む夫に  
大阿久雅子(東京都)
- 255 逆らはず風に従ひ落葉掃く  
田中美智子(埼玉県)
- 256 水馬重さ計れり水の窪  
井上氣海(広島県)
- 257 アイドルになりたい私小鳥来る  
高松愛(神奈川県)
- 258 蝶のようにコスモスの花揺れて舞う  
針生清(千葉県)
- 259 寒露という肌に優しい季節です  
星一子(神奈川県)
- 260 障子開け呼吸一番冬木立  
齊藤安弘(神奈川県)
- 261 八十路超え脚腰脳に秋の空  
花塚三郎(千葉県)
- 262 傾斜地も紅葉がうれし山の径  
鈴木みえ(長野県)
- 263 おほらかな母の生涯むかご飯  
藤田昭代(岡山県)
- 264 廃屋の雨にみだれし萩の庭  
柴田恵美子(北海道)
- 265 母偲ぶお手玉高くいわし雲  
大久保アヤ子(東京都)
- 266 行く秋や淹つぽなしの那智の滝  
増田公代(東京都)
- 267 夕やけのコスモス田にカメラの列  
岸田晴代(奈良県)
- 268 寒々と夜空に冴える冬の月  
秋山貞治(千葉県)
- 269 哀れなる最後のあがき枯蟻螂  
高橋まさ子(宮城県)
- 270 喜寿といふ齢を想ふ鯛雲  
宮川昭男(高知県)
- 271 露天風呂沈む木葉の日和かな  
橋本まこと(栃木県)
- 272 自分史の濁音を消す虫の夜  
山本せつ子(鹿児島県)
- 273 見渡せば錦織なす郷の山  
西條公雄(埼玉県)
- 274 銀河へと急ぎし人の後影  
橋本良子(埼玉県)
- 275 新米や真白き母の割烹着  
秋谷静子(茨城県)
- 276 水引や母百寿越へ嬬やかに  
北野耕兵(千葉県)
- 277 幾朝か蟬の葬送ばかりして  
中山日出子(大阪府)
- 278 仕舞屋の黒壁越しに萩の花  
中村和弘(愛知県)
- 279 露草にかがめば残る昨夜の雨  
増本和子(大阪府)
- 280 七八つ打ちてはとぎれ鉦叩  
青木涼子(埼玉県)
- 281 風鈴や四十九日の近くなり  
中野勝子(鹿児島県)
- 282 初霜をふんで急ぎの集いかな  
荒堀美代子(滋賀県)

- 283 臥す妻に音無く締める白障子 山本吉夫(三重県)
- 284 住み慣れてここがふるさと鯨日和 砂邊照代(香川県)
- 285 紅葉のつづら折りゆくわが生かな 浅野信廣(宮城県)
- 286 病窓に薄きカーテン後の月 高杉杜詩花(北海道)
- 287 秋風のかすかにひびく石だたみ 井田由利子(宮城県)
- 288 アンデルセンの白鳥来ている広瀬川 鈴木与平(宮城県)
- 289 忽ちにかげりし縁や秋の午後 山崎紀久江(福岡県)
- 290 秋祭り郷の言葉が蘇る 鰐部好三(愛知県)
- 291 俳句とは吐き出す詩や文化の日 五十嵐勝敏(新潟県)
- 292 書道展そえる紅葉の山野草 森ふく(千葉県)
- 293 敬老会一人歌へば皆歌ふ 二ノ宮利江(富山県)
- 294 ハイザーに飛び込む子猫収獲祭 柳澤京子(宮城県)
- 295 割れざくろ真赤な舌があかんべえ 大窪美代子(大阪府)
- 296 入院の妻に届ける秋のセル 津布久信雄(東京都)
- 297 ひとり去り二人去りして白木樅 小林紀美子(東京都)
- 298 さわやかに過さんこそ祈り起く 長谷部喜代子(大阪府)
- 299 迷わずに我が家に着いた帰り花 倉岡依世(東京都)
- 300 青春の蹉跎故山の鬼胡桃 川口襄(埼玉県)

## 10月号の 心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返答をお寄せ頂きありがとうございます！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

### 《大賞》

106 余生にもときめきありて夕涼み

野木宗信(奈良県)



野木 宗信様

・感動がなく  
なつたら人間  
やめるつもりで  
す。ときめき  
は一生です

阿部徳夫(宮城県)・ときめきは元気の秘密。夕涼みの季語が効果的。今井岩夫(千葉県)・俺もそうありたい。久本にい地(岡山県)・「ときめき」人はみなその感情が大切だと思います。石山幸枝(新潟県)・ときめきありとは感動のこと。高齢者の活気には必要。内河邦久(東京都)・いくつになってもときめきたい。竹村穂夫(大阪府)・縁側であろうか、夕涼つかの間どんなときめく事があったことでしょうか。藤井春三(埼玉県)・余生も楽しみとときめきを持って過したい。水落重式(新潟県)・生き生きと過されている様子、朝日奈良版でもよく、お目にかかつています。岸田晴代(奈良県)・十月十五日で満七十五歳になった私も日々ときめきある人生を過しています。句に深い共感を覚えます。宮川昭男(高知県)・年甲斐もなく思っていたが同じ人が居た村岡盛英(群馬県)・「ときめき」長生きする条件の一つだ。森崎榮久(岡山県)・数え年88歳になったが生涯青春を自認する共感の故。仲里達也(沖縄県)

### 【自句自解】

生を受けて現在八十四歳九か月。職退いて十五年。「老いてなお今も青春雲の峰」と詠みつつ明るい余生を満喫、俳句短歌を通じて多くの人達と交流をもつています。異性には恋心を持ち、交流のある方全て友達として明るく元気で一つ一つときめきを持ち、余生を送る積りです。人はときめきを失うといっぺんに老け込んでしまいますからね。五大新聞の俳句短歌に入選のときめきを持つて明るく笑顔を絶やさず、楽しみながら健康で過ごしましょう。

### 《川柳》

12 マネキンが小太りならば買ったはず

石原岳(群馬県)

・同感の一言につきます。高橋トミ子(山形県)・この作品は服装業界に知らせて上げたい。磯部徳彦(東京都)・共鳴です。私の場合小太りではなく大太りですが。楠瀬美香(高知県)・マネキンの体格の女性は少ない。これからは小太りのマネキンが増えそう。石原さんにカンバイ！奥田音野(香川県)・川柳は人間の本音が見えて楽しんだり同感したり、やられたと思ったりして。辻升人(東京都)・同感！中林恵子(大阪府)ほか

### 《俳句》

46 ちかぢかと星の降りくる帰省かな

美濃部紘三(新潟県)

・新潟の方だからどこへ帰省なさるか？故郷のある方はうらやましい。井原毬子(東京都)・故郷に帰省した時の実感が出ています。竹内ハヤ子(埼玉県)・上五の「ちかぢか」が「帰省」の心を詠むに叶う。小島岳青(新潟県)・田舎に帰省した時の綺麗な星空を思い

浮べられていい。中西秀雄(東京都)・故郷の空気の美しさ、澄みきった感じが身にしみます。南喜美子(千葉県)・主人の故郷松山市に行った時、星がきれいで近かった時の驚き。大窪美代子(大阪府)・僕の生家は八海山のふもと。「星の降りくる」が実感です。佐藤信(神奈川県)ほか

### 《短歌》

274 被災地の小さき遺体にランドセルわずかに青き色を残して

寒川靖子(香川県)

・悲しい。残念。ランドセルからの下句、特に。若林卓宣(三重県)・震災の悲しい現実。わずかに残った青色が悲しみをさそう。桑原謙一(群馬県)・命の大切さ、諸行無常のこの世、被災地の惨状を思います。井上氣海(広島県)

### 《他にも》

6 もて余す暇が危険を生んでくる

楠瀬美香(高知県)

- 15 どつかりと孤独と座る駅の椅子 藤井北灯(福岡県)
- 23 丸い背の母が迎える無人駅 羽田桐柳(群馬県)
- 40 優しさに触れると満つる涙壺 鏡たか子(山形県)
- 63 つづれさせ誰しも罪の二三つ 今井勝子(新潟県)
- 66 再読が初読の如し喜寿の秋 阿部至(埼玉県)
- 93 透ける身をもう構へる子蟻螂 川口襄(埼玉県)
- 123 アルバムの父の癖字や秋彼岸 長峰正晴(千葉県)
- 131 身長がまた縮んでる敬老日 紺谷睡花(東京都)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

**Q: 初詣で、お詣り以外に必ずする事は何ですか?**

紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できません。ことをお詫び申し上げます。



★おみくじ

- ・おみくじ、よき一年でありますよう念じて 川嶋法子(東京都ほか)
- ・「おみくじ」を引く、元旦に凶の入りっていないのは嘘です 濱田イサオ(福岡県)

★破魔矢・お守りなどを買う

- ・おみくじを買い、運なんて信じないのですが、なぜか年頭だけは別の様です 高橋登美子(山形県)
- ・何と言っても一年の始まりの吉凶を占うおみくじを引くことです。今年はどうな年かな? 石塚幸子(新潟県)
- ・一年の運を確かめたく必ず、おみくじを求めます(凶には出あつていません) 音喜多千津子(埼玉県)
- ・破魔矢を求め 石井美智子(埼玉県)ほか
- ・破魔矢を買う。おみくじを引く 青木涼子(埼玉県)
- ・家内安全と交通安全のお守りを買う 井上静夫(栃木県)
- ・女房が交通安全のお札を毎年家族五台分買って今年も安全運転でと手渡してくれる 石原岳(群馬県)ほか

★ていねいに参拝

- ・初詣は欠かしません。氏神様の境内でふだん会う事のない人たちに「あいさつをするのは大切な事です」 延原令岱(岡山県)

★絵馬

- ・子供たちが箱根神社に連れて行つてくれます。熱々の甘酒は毎年楽しみです 石崎ひろ美(神奈川県)ほか
- ・「絵馬」を奉納。内容は毎年決つて息子一家、娘、自分が一年間無事に過せますようにと記す 紺谷睡花(東京都)

★屋台

- ・天神様の絵馬をいただく 田中迪子(東京都)
- ・絵馬を買う。破魔矢を買う 磯部徳彦(東京都)
- ・絵馬掛けの祈願をみる 能條憲夫(神奈川県)ほか
- ・ポッポ焼きを買うこと 水落重武(新潟県)
- ・屋台をみて歩く 三津木俊幸(千葉県)
- ・新潟の初詣はいつも寒い時期ですので帰りに熱い「ポッポ焼き」を買い、ほおばつて暖まりながら帰ります 鈴木章(新潟県)ほか

★どんど焼き

- ・古い注飾りを神社で「どんど焼」に古い神様の御札など納める 佐野しづ子(愛知県)
- ・山本吉夫(三重県) 関根千恵(埼玉県)ほか

★縁起物を買う

- ・大晦日に出しておいた一年間お世話になつたお札等のお焚き上げの炎に手を合わせることに(寒いせいもありますけど...) 仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・だるまさんなど買い物です 会田とし子(神奈川県)ほか
- ・縁起物を買つて帰る 鈴木みえ(長野県)
- ・干支の根付を購入すること。初句会に備へ吟行(平安神宮の庭を観賞)。 勝田久美(大阪府)
- ・近所の神社で必ず招福熊手を買ひ一年の無事を祈ります 岩永登茂子(大阪府)ほか

★お酒・甘酒

- ・お酒を「ご馳走になります」 鈴木与平(宮城県)
- ・お神酒をいただき、その年の恵方に向つて少し歩きます 渡辺嘉幸(東京都)
- ・スルメをかみかみお神酒を飲む 諸橋文男(新潟県)
- ・妻は甘酒、私は樽酒を飲む 橋本世紀男(東京都)
- ・氏神社で御神酒をいただく 中西秀雄(東京都)
- ・封切の日本酒を熱燗で飲む。元日の朝酒です 山崎吉晴(群馬県)ほか

- ・振まわれる甘酒を飲むこと。おみくじを引くこと。絶対に焚火にあたること 星一子(神奈川県)
- ・初詣の帰りに 萬濃その子(神奈川県)
- ・帰りにお汁粉を専門店に食べる。 帰路鎌倉小町の馴染の古い喫茶店で孫達と初コーヒーをいただきます 上村元義(神奈川県)
- ・参詣帰りにみやげを買つて地方にいる孫たちに送る 竹澤茂子(大阪府)
- ・初詣の帰りの参道で「きぬかつぎ」を買ひその夜は長年の友人ご夫婦と酌み交わします 森川千英子(千葉県)
- ・晴れ着を着て午前中にお詣りをすませ、参道の店で必ず一服又は昼食をとる 増田公代(東京都)ほか

★お墓参り

- ・御先祖様へのおまいり 山田幸代(兵庫県)
- ・主人の墓まいり(お墓の近くに産土神社があるので、必ずお参りします。) 井原穂子(東京都)
- ・先祖のお墓まいり 暉峻康瑞(鹿児島県)
- ・父の墓詣り、いずれ私が入る墓だから 堀井醉人(茨城県)ほか

★写真

- ・デジタルカメラで 夫婦とおぼしき 方々の表情をバリバリとりまくる 北野耕兵(千葉県)



# A Q U E S T I O N N A I R E

- ・カメラアイになって写材を捜します  
小林七重(新潟県)
- ・家族が一同に会し全員写真を撮ります。子・孫の成長が楽しみです  
浦橋渴雪(兵庫県)
- ・境内の写真を撮る。ブログに使えるかな…  
岡本恵(茨城県)
- ・集まった家族で写真を撮る  
藤沢樹村(東京都)
- ★**★作句**  
どこへ出かけても作句作歌です  
宇都宮萬里(静岡県)
- ・そこら中を歩きまわって川柳を創ること  
松田重信(埼玉県)
- ・初句会を松の内に  
土谷敏雄(秋田県)
- ・新年の俳句をいくつか作ります  
宮川昭男(高知県)
- ・新年の川柳を作ること。今年の抱負。夢  
宮崎正男(群馬県)
- ・世界の平和を祈り、俳句を一句作る  
小山たけし(埼玉県)
- ・俳句を作ること  
湯浅芳郎(岡山県)
- ・「初句会」を二十二年欠かさずに実行してあります  
松嶋光秋(東京都)ほか
- ★**★年賀状**  
年賀状の整理をします  
井上氣海(広島県)
- ・年賀状を楽しく拝読する  
五味田幸夫(栃木県)ほか
- ★**★特になし**  
・食う寝るだけの余生です。ほかに何も有りません。  
卒寿とて扱う  
厄無し初詣で  
磯山陽吉  
(東京都)



- ・寝正月です(恥ずかしい!!)。  
今井勝子(新潟県)ほか
- ★**★家族と過ごす**  
・家族そろって会食することが習慣になっている  
柚山美峯(東京都)
- ・家族でとる百人一首  
山崎鶴恵(鹿児島県)
- ・家族全員歌留多会です。私は一杯飲みながら  
早矢仕邦夫(愛知県)
- ・家族揃っての祝い膳  
青木ケン子(埼玉県)
- ・家族揃って屠蘇でカンパイ  
奥田音野(香川県)
- ・共に九十七才の双方の母を十二人の家族で囲んで祝う  
竹村穂夫(大阪府)
- ・実家に立ち寄り高齢(96才)の母の健康を祝う  
益永克之(福岡県)ほか
- ★**★お孫さんと**  
・孫(曾孫におとし玉)  
高井逸代(岡山県)
- ・孫と羽根突き  
前川和市(兵庫県)
- ・孫五人に新年と健康について電話する  
工藤昌見(山形県)
- ・孫達とカルタ取り  
中嶋秀次郎(埼玉県)ほか
- ★**★音楽**  
・琴のCDでもかけて心ゆつくりしましょうか。娘の琴はなかなか弾いてくれそうもないので…  
佐伯セツ子(香川県)
- ・新潟の万代太鼓の演奏を聴き、獅子舞いを見ます  
若月理依子(新潟県)
- ★**★書初め**  
・書き初め  
新田一望(岩手県)ほか
- ・書初、元旦試筆。毛筆で短冊か色紙に私の新年句  
久保和友(滋賀県)

- ・書初め(ただし原稿を書くこと)  
寒川靖子(香川県)
- ★**★御年始・挨拶**  
「一年の計は元旦にあり」の格言のように、お世話に思う人に挨拶する  
須澤重雄(長野県)
- ・年始に行きます  
菊地すえ(北海道)
- ・今は浄土に居る母だが、実家の挨拶をしに行く習慣  
増島淳隆(東京都)
- ・親類へ挨拶巡り  
五十嵐勝敏(新潟県)ほか
- ・毎年二日を兄弟会として年始の省略をかね集まる事としています  
野村牟人(東京都)ほか
- ★**★接待**  
・客の接待。近くに温泉があるので温泉に行きます  
橋本まこと(栃木県)
- ・神社でするのでお札売りをしお参りの皆様もお迎えします  
大鳥居牧子(東京都)
- ・地元のお宮の役をしています。毎年初詣の人たちを接待しております  
中村和弘(愛知県)ほか
- ★**★初日の出**  
・埼玉と千葉の県境、江戸川にかかる橋の上で初日の出を見ること。来年はスカイツリーも見ること  
吉村充治(埼玉県)
- ・南に向いて広がる志布志湾の初日を見に行きます  
山本せつ子(鹿児島県)



- ・必ず日の出を拝み、初詠みをいたします  
松涛千鶴子(東京都)ほか
- ★**★体を動かす**  
・剣道、形稽古  
森俊彦(神奈川県)
- ・元旦マラソン大会に参加すること  
新井賢(埼玉県)
- ・趣味のゴルフです  
椋本望生(大阪府)
- ・初登山で近くの山によります  
篠原三郎(静岡県)
- ・朝公園にラジオ体操に行きます  
福原喜恵子(群馬県)ほか
- ★**★歩く**  
・浅草の散策をします  
森ふく(千葉県)
- ・新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んで歩く(五、六千歩を目指して)。  
久本に地(岡山県)
- ・ゆつくり歩くこと  
有田俊一(埼玉県)
- ・家のまわりの除雪をして30分ぐらいウォーキングをする  
杉村美保子(岩手県)
- ★**★手帳書き初め**  
・三年手帳で初年度の書始めを読み直しています  
齋藤忠弘(千葉県)
- ・柴又帝釈天に行った後、草団子を食べながら、今年の目標を手帳に書き込みます  
福田和子(東京都)ほか
- ★**★メール・電話**  
・親友に新年のあいさつメールを送る  
針生清(千葉県)
- ・電話をかける、挨拶、おとそ…  
中嶋清子(佐賀県)ほか
- ★**★若水を汲む**  
・若水をくむ  
黒澤正行(福島県)ほか
- ★**★仏壇・神棚**  
・仏壇に鏡もちを供える事です  
小暮昭司(群馬県)

・亡き両親、亡夫の入っている仏壇にお供えとお水を上げること

山崎れい子(新潟県)

・毎朝家の神棚に二礼二拍手一礼、今日一日の無事を願い感謝しています

田澤宏(新潟県)ほか

## ★食べる

・「おぞうに」餅をいただきます

神野弘(岡山県)

・伊勢神宮の内宮前のおかけ横丁の「すし久」で朝粥を食べること

若林卓宣(三重県)

## ★みんなでワイワイ

・オセチを家で食べて、歌仲間10人ぐらいでカラオケ店で歌い初め

神田治(千葉県)

・百人一首(内、外孫直系尊族一同)花札(内、外、孫達と)

森崎榮久(岡山県)

## ★お買いもの

・神社のそばで美味しい菓子を買います

竹野紀子(東京都)

・おいしいものを買いにゆく

五十嵐睦博(新潟県)

## ★お風呂

・朝風呂

辻升人(東京都)

・ゆつくりと入浴し、体を温め、今年のことを思い出します

美濃部紘三(新潟県)

## ★我家の伝統

・初詣に出かける前に家族一同「口祝」と称して「つるし柿」を一箇ずつ食べる

猪股凡生(新潟県)

・箱根駅伝を国道にて応援後三世帯で新年会

鈴木満明(東京都)

・いやがる夫に和服を気付けること。一年に一回しか着ないのだから

藤井碩子(山口県)

・娘夫婦の車でドライブ。東なら箱根芦ノ湖、西なら静岡丸子宿の「とろろ汁」、南へ伊豆の「天城越え」、いやいやわが家の妻の遺影の下で「年の酒」にしましょうか 関忠恕(静岡県)ほか

## ★その他

・神社の境内掃除(毎月第一日曜)

渡辺茫子(千葉県)

・成田市成田山参道「新春書展」ギャラリーに立ち寄り来場者の方々と新春を祝う言葉を交わすこと

南喜美子(千葉県)

・道すがらの門松を見ること

緑川禎男(埼玉県)

パチンコ

・北斗星と北斗七星の確認

安部哲(新潟県)

・巫女さんにお鈴のおはらいを頂くこと

堀木和子(大阪府)

・5メートルのポールに国旗掲揚

安田翔光(香川県)

・一年の計を立てる。そして一年を予測する。大へん難しい

岩村昇(神奈川県)

・一年間の家族の健康を…。新句を奉納する

佐瀬千恵(神奈川県)

・歌集の整理(今年は歌集作り)

北岡晃(兵庫県)

・私の誕生会。1月3日生 デイサーピスでの誕生会

宇田川正雄(埼玉県)

・写経、かな百人一首を書いている

岩橋千代子(北海道)

・初雀の声を聴きます

北村純一(神奈川県)

ほか



# 新潟ぶらり

## ★東区の工場夜景

工場夜景がもてはやされていることは、数年前に知った。工場に美を見出す「工場萌え」という言葉や、最近では川崎など各地で工場夜景をたのしむクルーズが企画され、人気を集めていることも。どうやら観光資源のひとつになつていらい。

弊社が位置する新潟市東区には、明治時代後期に新潟鉄工所が工場を設けて以降、大正から昭和にかけて多くの工場ができた。現在でも同市を代表する工業地域であり、まさに「工場萌え」を感じることが可能な地域だ。信濃川と阿賀野川の間にある東区。この二つの川をつないで、東区を横切るように流れているのが通船川と呼ばれる川なのだが、その周辺に工場が多い。

工場夜景のシーズンは、なんと冬だという。コートのボタンを全部とめ、冬帽子をかぶつて出かけた。通船川沿いに聳える工場――闇に明るく浮かび上がる銀色の配管、タンク、煙突たち。ある人は宇宙ステーションのようだと評している、ある人は近未来都市のようだと言っていたが頷ける。星はみえない。寒そうな月とともに、夜間照明が様々な色の光を放っている。目の前を流れる川が、ゆらゆらしながらその光を受けとめていて美しい。工場からは大きな音

こそしないものの、煙突からは絶え間なく白い煙がのぼり、冬の風に流されている。

工場の白き白煙寒の空  
望月田鶴子

以前視聴した「新日本風土記」(NHK)で、夜景があたたかいのは、それが誰かがつけた灯りだから――と言っていたのを思い出した。一つひとつの光に、それぞれの生活があることを想像する。あの光のなかで、どんな人が、どんなことを感じて生きているのだろうか…。工場の光もまた、私たちがいまこうして生きていることの証なのだ。身を切る寒さのなか、白い息を吐きながら、働く光の美しさを暫くの間眺めていた。

(菅真理子)



第26回目の今回は、内田友子さまよりバトンを託された水野喜子さま。  
以前、ご登場いただいた片目のウインタさんに、その後新しい家族が増えていたとは！  
男らしいギンペイは、その引き際も見事なものでした(ウウッ…)

●お客様の『リレーエッセイ』

## ペン子とギンペイ

水野喜子

(東京都・新宿区)

片目のウインタさん一家五匹が、わが家にすでに同居しているというのに、又、この二匹が加わってしまったのは、二十五年も前の、初夏の夕暮れだった。自転車で買い物に出ていた途中、郵便局前の草むらに何やら気懸りな人だかりがあるのを見つけた。のぞいてみれば、なんと小さな菓子箱にボロ布が敷かれ、目もあいていない猫の赤ちゃんが四匹。か細い声を出し、イモ虫のように動いていた。まっ黒のふわふわの毛の子と白と茶の縞模様の、やはりふわふわの毛並の子三匹だった。みんな「かわいそうに……」とは言うものが見ているだけだった。そのうち、会社帰りらしい若い女性が「私、この子もらうわ」と黒毛の子をとり上げ、ハンカチにくるんで帰っていた。

私は、「もう、家に五匹いるからダメよ！」と自分に言いかけ、誰か里親になつてくれることを祈りながら、その場を後にした。買物をすませ、やはり気になって寄ってみると、まだ三匹はそのまま。捨てた人のせめてもの心くばりなのか、菓子箱に入れてあった。牛乳もそのままであった。人だかりもみななくなったものの、まだ六、七人はいただろうか。「私、アパート住いだから一匹ならいいけど、あとの子置いて帰るのは、とても心が痛くて……」という女性があられ、「それじゃ、私があとの子二匹を」と思わず言ってしまった。まっいいか！の私の悪いクセ(?)が、ここででてしまった。優しいその女性は「お互い、選んでつれて帰るのは切ないから、ヨーイ！ドン!!で、目をつむって取り上げましょうヨ」同感。

私たちは箱に手を入れイモ虫猫?を手にした。「みんな幸せになりましょうね。元気でね。」と言って別れたのである。

こうしてペン子とギンペイはわが家にやってきた。命名は、主人が毎日放送制作の「ペンギン、タイム」に九年間毎朝放送していたのが丁度終ったときだったので、その記念としてペン子とギンペイにしたのである。

幸い、ウインタ母子とも仲良しでほっとした。ペン子は誰もが思わず「カワイイ！」と言うほど、本当にかわいらしい猫だった。ふわふわの毛並、小顔で黄色の瞳、手足が太くて短かいのが、一層、愛おしかった。ブランド猫?とよく聞かれたことも。性格はおとなしく女性的で、いつもギンペイ君の後について歩いていた。

たしかにすてきな猫だったけれど、私は、本当に猫らしい猫はギンペイの方だと思ったのである。常に、妹とも思われるペン子を大切に守り、男らしい猫だった。私は大好きだった。あの優しいやさしい目は忘れられない。

ペン子が十七才の頃、急に食欲がなくなり本郷の東大農学部内の動物病院に連れて行った。腎臓病と言われ、いかにも二ガそうな黒い果粒の薬を処方された。とにもかくにも、飲ませることの難しいことといたら……。せつかく口に入つてもはき出してしまふし、余程いやだったのでしよう、暴れる暴れる。ペン子も、どんなに辛かったことであろう。私も悲しかったけど、今では懐かしい思い出である。通院には、網が張つてある動物用のリュックサックに入れ、私は背負つて南北線に乗つて行った。それは又家事と仕事で疲れ切つた私の心のトゲを抜いて、楽にしてくれたひとときでもあった。私が中学一年の時生まれた十三才はなれた妹をよくおんぶしていたこと、息子が赤ちゃんの時おぶつてピアノを練習したりしたことなどと思い出し、三回目は猫

をおんぶしてるんだと苦笑したりしていた。

ペン子はその後、何年も通院を余儀なくされたけれど、二十一才まで生き切り、最後は人間でいう痴呆になつてしまい、テンカンのような症状も出て、一ヶ月余入院した。いよいよという時、先生から、最後はお家の方がいいのではと言われ、つれづれ帰つて間もなく私の腕の中で静かに、眠るように息を引きとった。一方ギンペイは、外傷以外病院へは行ったこともなく、元気な一生であった。

しかし、ある日、食欲が細くなり、外にもトイレ以外は出ていかないようなので、病院へ連れて行くと、まあ年のせいでしょうけど、一応血液検査をとつて採血し帰宅したものの、二日後その結果も知らず、突然旅立ってしまった。ほんの少しの夕食を口にし、いつものように私のベッドに入り、私が気付いた時には、もうゆつくりとした呼吸で、私の胸に顔をぴったりくっつけていた。どんなに呼びかけても返事はくれなかつた。何がなんだか、キツネにつままれたようで、唯々涙が止まらなかつた。

本当に、ママ孝行で私に面倒をかけることは一つもなく、楽しませてくれたギンペイ君とは全くあつけない別れだった。

十九才だった。

ギンペイを庭に埋り、無花果の木を植えた。三年後、ペン子がなくなつた時、ギンペイ君により添うように葬つた。

仲の良い兄妹は、毎年、みごとな大きい実をつけ、私たちに会いにきてくれる。無花果が大好きな主人は、毎年美味しいを連呼しながら、ご馳走になつてゐる。

ペン子とギンペイは、本当にすてきな兄妹猫であった。

四姉妹、長女の私は、こんなお兄ちゃんがほしかった。



## 滋味しみじみ◎◎◎

### 食に関するミニエッセイ



阿部澄江様 (宮城県)

私と母が、交わした最後の会話は「お母さん、夕張メロンゼリー食べる？」…「食べるよ」でした。自分の口から、ほんのわずかでも食べるということは、母にとって、生きたいという気持ちそのものだったに違いありません。

まさに、生きることは食べることでした。それから半年…。食べ物をお口にすることなく、病と闘い、母は力尽き天国へ…。

生前、母はお料理が大好きで「つくるときはいつも、つくったものを喜んで食べてもらう人のことを考えて一生懸命作るのよ」といつも私に話しながら、台所に立っていました。また、「命をいただいているということを忘れずに、いただきますはきちんとと言ってね」。よく母に言われたことが今、思い出されます。

食べる幸せ、つくる喜び、命をいただくことへの感謝、教えてくれた母に頭が下がる思いです。食事は生きる基本、まさに『食は修行』なのだということを日々、実感しながら、今を大切に生きています。

様々な経験を通じて、「食」に関する知識を増やし、すこやかな食生活を実践することができる力をはぐくむための食育は、これからも、私たちが生きることの意味を知る、最も重要なテーマかと思います。『つくる喜び、食べる幸せ、そして感謝の気持ち』さあ、皆さんも、実践してみようではありませんか…！

●食に関するミニエッセイ「滋味しみじみ」の原稿を募集しています。400～500字の原稿をP16下記の宛先に封書かメールにてお送りください。勝手ながら採用の可否については、弊社に一任させていただきます。おいしいお話、大歓迎です!!

## 有言実行 見習います!

前号の「喜怒哀楽 10月号」の「深まりゆく秋、何をして楽しみたいですか?」の質問に「筆で巻き手紙をかいて楽しんでみたいです」とお書きくださった東京都の増田公代様。



▲さらさらとしたためられたら素敵ですね☆

掲載紙がお手元に届いてから約一週間、当社に一枚のお手紙が…。まさしくこの巻紙のお手紙でした!一通目は80歳の知人に敬老の日のお祝いとして、二通目は弊社に、そして三通目はどんな人にどんなことを書くのか自分でも楽しみにしています、とおっしゃる増田様。

「読む楽しみ、書く楽しみ、考える楽しみ、挑戦する楽しみ等々、ご縁をくださった御社に…」云々とあり、こちらこそ、とてもうれしくなりました。「挑戦する楽しみ」、おっしゃる通りですね。当社も来年は楽しみながら新しいことに挑戦したいと思っています。ありがとうございました。

## 『東京文芸』会員募集中!

『東京文芸』は文芸ものの総同人誌で、エッセイ、短編小説、現代詩、短歌、俳句、評論など数多くのジャンルのものを掲載しています。

現在、会員募集中です。入会金、会費は不要ですので、ぜひご一報ください。

連絡先: 降矢政治 〒185-0035 東京都国分寺市西町4-30-29 ☎042-575-5764



▲最新刊 月刊『東京文芸 145』

## ポストカード好評発売中!

毎回ご好評いただいた当社のオリジナルポストカード(1組8枚入り500円×各季節)。今回は冬バージョンより「りんご」を同封いたしました。お気に召されましたら、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。



## スタッフの一言

Q. 初詣で、お詣り以外に必ずすることは何ですか



一年間使用した注連縄を手に、徒歩8分の新潟総鎮守白山神社へほろ酔い気分でゴー。よく身体を拭いた大誠人形と初穂料を納め、お札をもらうわけですが、数年前には誤って初穂料の袋を注連縄とともに火の海へ。あっ!!



初詣、これといって特別なことはしませんが、どうしてか毎年家からだいぶ遠い弥彦神社へ行きます。ある年は、ちょっと時間がずれたために、大混雑に巻き込まれ、帰りが遅く……。



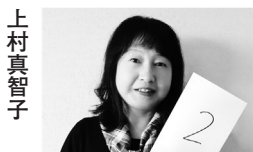
家族でおみくじをひき、そこに書いてある短歌がその人にとって何を暗示するものなのか、あーだこーだと言いつつ……来年も楽しみです。



家族大集合、夫の実家にお仏壇詣りにいき、その後昼から真剣に飲んで飲んでのみまくりします。その後毎年飲みすぎたことを反省するのがならわしです(笑)



午前11時頃、お詣り後、出店で好み焼き(毎年、粉っぽい。去年の方が美味しかった、など新年早々辛口)、おばあちゃんへお土産にぼっぼ焼きを買う。その後混んでるところに行きたいという変わった母に連れまわされ、お買い物へ……。



近所の小さいながら大形神社へ。雪が降って凍っている日が多いので、寒さに震えながらお詣りの後、持参した古い注連縄とお札を火に投げ入れ、ポーと火を眺めながら体を暖めます。



毎年に行かない初詣。時間も日にちも関係ないときにお参りに行くときもあります。元旦は朝早くから元旦歩こう会に参加しています。



地元の昔ながらの松浜稲荷神社を詣でた後は、敷地内の他の社を詣でます。小さい社ですが、火の神様、海の神様、そして戦没者を祀ったお社。全部まわらないとどうも落ち着きません。



年明け15分前に神社へ行き長蛇の列でカウントダウン。新年を迎えお詣りしたあと町内の出店で年越しそばを食べる。このそばがまた美味い!ここ何年か二年参りは決まってこのパターンです。二年参って言うの新潟だけ?



1歳3ヶ月になりました。寒さに負けず元気いっぱい!

●プロフィール

1968年横浜市生まれ。歌人集団「かばんの会」同人。1998年短歌研究新人賞を受賞。歌集に『微熱体』(2000)、『そこにある光と傷と忘れもの』(2003)、『飛び跳ねる教室』(2010)がある。本職である国語科教師としてのエピソード満載の短歌エッセイ集『今日の放課後、短歌部へ!』を、2013年、角川学芸出版から刊行予定。



詠み人の『リレーエッセイ』

青春時代はいろいろあるけど、それでいいんだ!

千葉 聡

千葉聡さんのエッセイもとうとう今回が最終回。誰もがご多分にもれず通ったはずの「青春」という道のり、追体験をしなから楽しませていただきました。次回からは北海道在住の角川短歌賞、現代短歌評論賞を同時受賞した若手男性歌人です。

廊下で会ってもぼんやりしていたし、授業中もうつむいていた。何かあったのかなあ。昨日は廊下で大笑いし、昼休みにはエグザイルを歌いまくり、部活のあとは「お疲れさまでーす」と調子よく帰っていったのに。

「Tくん、元気がいいですね」

「うん。私もそう思った。どうしたのかなあ」

気づいたのは俺だけじゃない。学年の先生の間でも話題になる。でも、答えなど出ない。Tくんの不機嫌は数日続き、そのうちそれが当たり前になってきた。

水に溶けそうな想いを綴るにはライトブルーの

このペンがいい

魂の翼もがれて生きること痛まし千々石ミゲル

の棄教

柴田 瞳

国語科準備室前の小さな黒板に、毎日、現代短歌を書いている。「水に溶けそうな想い」も「魂の翼」も、Tくんの姿を思い浮かべながら書くと、悩み多き高校生の心情を代弁しているように思えてくる。Tくんは、この黒板を見てくれるだろうか。短歌の言葉は彼の胸に届くだろうか。少しでも元気になってくれるだろうか。

明るく元気な言葉で貫かれた「応援ソング」のような短歌を書こうと思ったが、そんなのは嘘くさい。考えた末、青春応援キャンペーンとして、しばらく「青春」を詠み込んだ歌を書き続けることにした。

青春の心拍として一粒のカシスドロップ白地図に置く

野口あや子

青春という字を書いて横線の多いことのみなせか気になる

「まだ」と「もう」点滅している信号に走れ私の

中の青春

青春はみづきの下をかよふ風あるいは遠い線路

のかがやき

「このごろ青春の歌ばかりですね」

生徒たちから言われると「うん。青春キャンペーンなんだ」だけ答えた。あえて「応援」という言葉は出さなかった。

短歌の中の「青春」は、痛みや憧れや悲しみを伴っている。そういう、きれいなことでない「青春」を紹介すること、高校生たちが何かを感じてくれたら、それでいい。Tくんだって青春の真ん中にいるんだ。いろんな時期があつていい。静かにしていきたい時期があつたっていいんだ。無理に明るくするほうが不自然だ。

そろそろ青春キャンペーンを終わらせようかと考えたした夕方、帰りがけにTくんが話しかけてきた。

「カシスドロップの歌が良かったです」

久しぶりに聞く彼の声。

「うん。その歌、俺も好きだよ」

そう答えて、俺は「じゃあ」と手をあげた。Tくんはコックツとうなずいて帰っていった。



2012. 12. vol.65 (2012年12月10日発行/隔月発行)  
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション  
〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550  
0120-819-395  
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com  
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

編集後記  
6月に俳句結社の全国大会で新潟に来られ、楽しく一献を傾けたお客さまが11月に亡くなりました。弊社設立当初より、短歌雑誌をお手伝いさせていただいている主宰をはじめ、この2ヶ月で亡くなりました方が次々と判明する。親友が11月に乳ガンの手術で入院した際、久しぶりに会おうと連絡した別の友達が悪性リンパ腫で同じ病院に入院していることがわかり二人のお見舞いへ。周囲で次々と起こるこの現実には「また今度ね!」はない、ということ伝えてくれる。「今、ここ」を重ねつつ、今、この紙面をお読みいただいているという幸せを感じながら日々を送りたい。一年間ありがとうございました。(木戸敦子)